

# 錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要III

1988

滋賀県教育委員会  
財団滋賀県文化財保護協会

# 錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要III

1988

滋賀県教育委員会  
滋賀県文化財保護協会

# 序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化的な環境づくりにとりくんでいます。そうした中で文化財の保存と活用を図る施策は、重要な課題となっております。

先人の遺してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々にいたる貴重な宝でもあります。このような文化遺産を後世に引き継いでいくためには、広く国民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに個人住宅等建設工事に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護の御理解に役だてていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました、地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

平成元年3月

滋賀県教育委員会

教育長 西 池 季 節

「錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅲ」正誤表

	誤	正
P10 下から 8 行目	<u>遺物面</u>	<u>遺構面</u>
P14 4 行目	2. 遺構	2. 遺構
P16 下から 8 行目	類似	類例
P17 4 行目	試掘坑	試掘坑
P19 下から 9 行目	類似	類例
P34 7 行目	このまで	これまで
P43 下から 5 行目	試掘坑	試掘坑
P44 7 行目	同上	同上

## 例　　言

1. 本書は、国庫補助事業に伴う錦織・南滋賀遺跡の発掘調査概要であり、昭和61・62年度に発掘調査を実施し、昭和63年度に整理したものである。
2. 本調査は、昭和63年度国庫補助金を得て、滋賀県教育委員会が（財）滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 発掘調査にあたっては、地元地権者 梶田幸男、青木久幸、中村昭治（62年度）、大伴利幸、山極清次、山極靖子、中西 登、林 弘一、古市光男（61年度）の諸氏の協力を得た。
4. 本書で使用した方位は第VI系座北に基づき、高さについては、東京湾の平均海面を基準としている。
5. 本事業の事務局は次の通りである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	掘出　亀与嗣
課長補佐	小川 啓雄
埋蔵文化財係長	林 博通
主任技師	用田 政晴
管理係主任主事	山出 隆

（財）滋賀県文化財保護協会

理 事 長	吉崎 貞一
事務局長	中島 良一
調査普及課長	田中 勝弘
調査第一係長	大橋 信弥
技師	横田 洋三（調査普及課）
技師	細川 修平（調査第二係）
技師	稻垣 正宏（調査普及課）
総務課長	山下 弘
主任主事	松本暢弘
主任主事	東浦 良子

6. 本書の編集・執筆は、大橋・横田・細川があたり、文末に分担を明記した。
7. 出土遺物や写真・図面については、滋賀県教育委員会で保管している。
8. 本書の作成にあたっては、寿福 滋、中山由美、国松理恵、宮崎砂智子、前田朋美、高田幸治、有坂道子の諸氏の協力を得た。

# 目 次

## 序

## 例 言

I. はじめに .....	1
II. 61-1 地点の調査 .....	5
III. 61-2 地点の調査 .....	7
IV. 61-3 地点の調査 .....	13
V. 61-4 地点の調査 .....	17
VI. 61-5 地点の調査 .....	21
VII. 61-6 地点の調査 .....	32
VIII. 62-1 地点の調査 .....	35
IX. 62-2 地点の調査 .....	37
X. 62-3 地点の調査 .....	41
XI. おわりに .....	45

## 挿 図

第1図 位置図 .....	1
第2図 調査地点配置図(1)南滋賀遺跡(61・62年度) .....	2
第3図 調査地点配置図(2)錦織遺跡(61・62・63年度) .....	3
第4図 61-1 地点位置図 .....	5
第5図 61-1 地点断面柱状図 .....	6
第6図 61-2 地点位置図 .....	7
第7図 61-2 地点トレンチ設定図 .....	8
第8図 61-2 地点断面実測図 .....	9

第 9 図	61-2 地点遺物実測図	10
第10図	61-3 地点位置図	12
第11図	61-3 地点平面断面実測図	13
第12図	61-3 地点遺物実測図	15
第13図	61-4 地点位置図	17
第14図	61-4 地点平面断面実測図	18
第15図	61-4 地点遺物実測図	19
第16図	61-5 地点位置図	22
第17図	61-5 地点トレンチ設定図	23
第18図	61-5 地点平面実測図	25
第19図	61-5 地点断面実測図	26
第20図	61-5 地点遺物実測図	27
第21図	61-5 地点遺構配置図(1)	28
第22図	61-5 地点遺構配置図(2)	29
第23図	61-5 地点遺構配置図(3)	30
第24図	61-6 地点位置図	32
第25図	61-6 地点平面断面実測図	33
第26図	62-1 地点位置図	35
第27図	62-1 地点トレンチ設定図・平面実測図	36
第28図	62-2 地点位置図	37
第29図	62-2 地点トレンチ設定図・断面実測図	38
第30図	62-3 地点位置図	41
第31図	62-3 地点トレンチ設定図	42
第32図	62-3 地点平面断面実測図	43
第33図	62-3 地点平面実測図	44

## 図 版

- 図版 1 1. 61-1 調査前景（北より）  
 2. 61-1 T-1 遺構検出状況（北より）

- 図版2 1. 61-1 T-2 遺構検出状況（北より）  
2. 61-1 T-2 深掘り断面状況（北より）
- 図版3 1. 61-2 調査前景（南より）  
2. 61-2 T-1 全景（北より）
- 図版4 1. 61-2 T-1 全景（南より）  
2. 61-2 T-1 断面（東より）
- 図版5 1. 61-2 T-2 全景（南より）  
2. 61-2 T-2 深掘り状況（北より）
- 図版6 1. 61-3 調査前景（東より）  
2. 61-3 T-1 柱穴検出状況（東より）
- 図版7 1. 61-3 T-1 柱穴検出状況（西より）  
2. 61-3 T-2 断面（東より）
- 図版8 1. 61-3 T-2 柱穴検出状況（東より）  
2. 61-3 T-2 断面（東より）
- 図版9 1. 61-4 調査前景（東より）  
2. 61-4 T-1 全景（南より）
- 図版10 1. 61-4 T-1 断面（南より）  
2. 61-4 T-2 近景（北より）
- 図版11 1. 61-5 調査前全景（東より）  
2. 61-5 柱穴列検出状況（北より）
- 図版12 1. 61-5 柱穴列近景（北より）  
2. 61-5 柱穴列全景（西より）
- 図版13 1. 61-5 柱穴列検出状況（西より）  
2. 61-5 トレンチ南断面（北より）
- 図版14 1. 61-5 SK-1 近景（東より）  
2. 61-5 SK-2 近景（南より）
- 図版15 1. 61-6 調査前景（西より）  
2. 61-6 T-1 全景（東より）
- 図版16 1. 61-6 T-1 近景（南より）

2. 61-6 T-1 近景（東より）
- 図版17 1. 61-6 T-2 近景（北より）
2. 61-6 T-2 断面（東より）
- 図版18 1. 62-1 調査前景（北より）
2. 62-1 T-1 近景（北より）
- 図版19 1. 62-1 T-2 重機掘削状況（東より）
2. 62-1 T-2 全景（東より）
- 図版20 1. 62-1 T-1 遺物検出状況（東より）
2. 62-1 T-1 遺物検出状況（北より）
- 図版21 1. 62-2 調査前景（西より）
2. 62-2 表土掘削状況（南より）
- 図版22 1. 62-2 T-2 全景（南より）
2. 62-2 T-1 全景（南より）
- 図版23 1. 62-3 調査前景（北より）
2. 62-3 造成土除去状況（南より）
- 図版24 1. 62-3 造成土除去状況（南より）
2. 62-3 造成土除去状況（西より）
- 図版25 1. 61-2 出土遺物
2. 61-3 出土遺物
- 図版26 1. 61-3 出土遺物
2. 61-3 • 61-4 出土遺物
- 図版27 1. 61-5 出土遺物
2. 61-5 出土遺物

## I. はじめに

本年度 錦織・南滋賀地区で発掘調査を実施したのは、別表の通り5地点であったが、昭和61年度には6地点、昭和62年度には3地点の調査を実施している。本書にはこの61・62年度の調査成果を収載した。

本文中でもふれられているように、調査の大半は、住宅建設に先立つ小規模なものばかりであり、その成果も遅々たる歩みと言える。しかしながら、それらの中でも、大津宮にかかわる遺構・遺物だけでなく、その前後に展開する地域の動向が、わずかの遺構・遺物の発見の積み重ねによって、徐々にではあるが明らかになりつつある。今回の報告においても南滋賀弥生遺跡の実態が、若干明らかになったし、大津宮錦織遺跡について、從来未発見であった。南北柱穴列の存在が明らかになり、その構造を考える上で、注目すべき資料を提示することができた。今後の調査の積み重ねにより、大津北部の地域史の全体像が、より明らかになるとみられる。本書がその捨て石になれば幸いである。

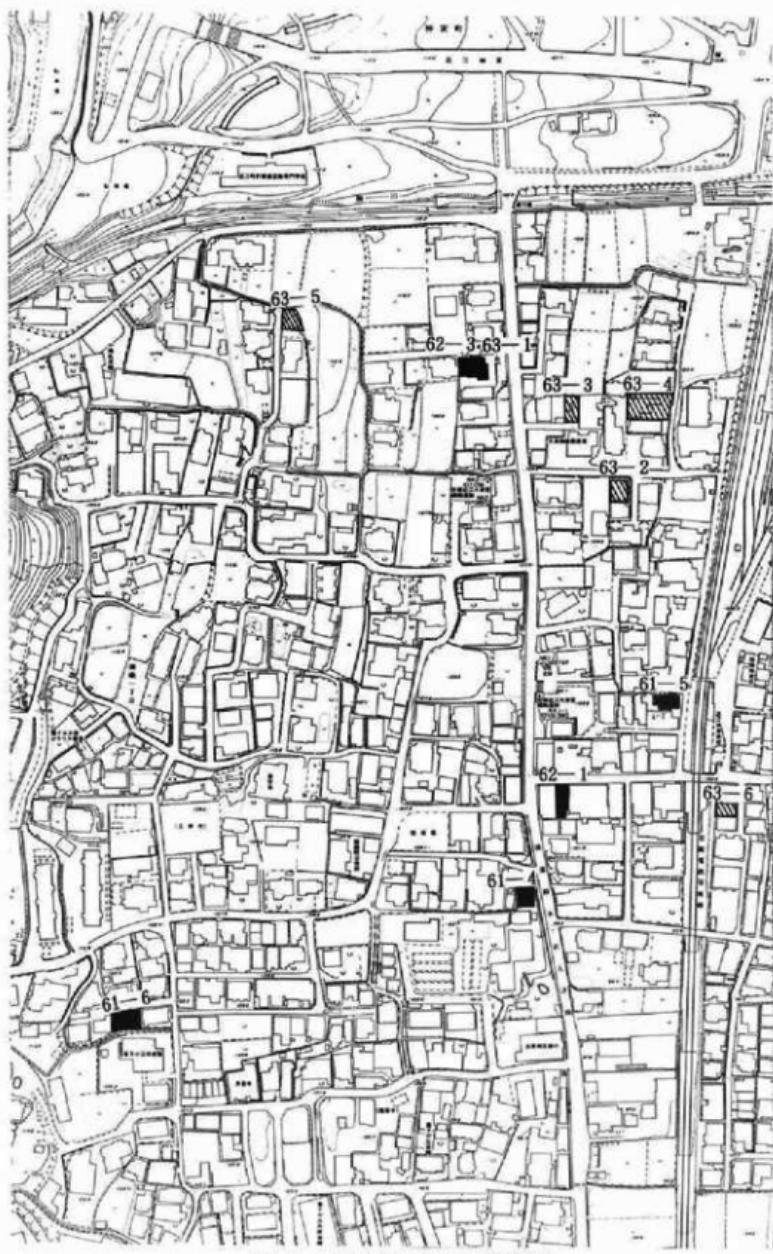
(大橋 信弥)



第1図 位置図 (S=1/25,000)



第2図 調査地点配置図(1) 南遊賀遺跡



第3図 調査地点配置図(2) 鎧籠遺跡

昭和63年度 調査一覧

番号	申請者	所 在 地	調査期間	調査内容	対象面積
63-1	中村 昭治	大津市錦織1丁目	4月1日 ～5月10日	現地表下より～2.2mで、2×3間の東西棟 掘立柱建物1棟、それに重複する形で東西方 向の掘立柱柱列跡3間分を確認した。東西棟 建物跡は大津宮方位に合致する。	250m <sup>2</sup>
63-2	鈴木 盛夫	大津市錦織2丁目	5月24日	遺構・遺物確認されず。	264.4m <sup>2</sup>
63-3	藤本 青一	大津市錦織2丁目	5月24日 ～6月6日	現地表下2.0mにおいて、掘立柱建物跡、土 壘状構造、それに伴う溝跡などを検出、その 時期は白鳳時代から平安時代である。	196.85m <sup>2</sup>
63-4	西岡 宏	大津市錦織2丁目	7月20日 ～9月12日	現地表下1.3～1.7mにおいて掘立柱列1列 (東西方向3本、1.5m間隔)を確認、掘立 柱建物跡の北西部とみられる。	156.51m <sup>2</sup>
63-5	早瀬 文夫	大津市錦織1丁目	10月19日 ～10月27日	現地表下1.1～1.2mにおいて柱穴(東西方向 3本、南北方向3本、0.6m間隔)を確認した。	138m <sup>2</sup>
63-6	伊吹 敏明	大津市桜野町1丁目	1月23日 ～1月25日	現地表下0.6m～1mまで近代の擾乱跡であ る。遺構、遺物は確認されず。	85.39m <sup>2</sup>

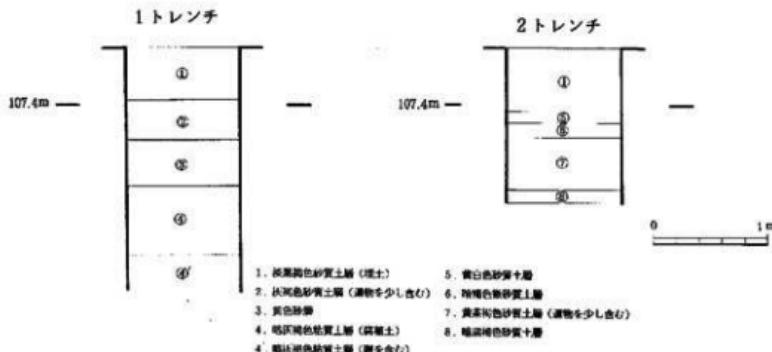
## II. 61-1 地点の調査

本調査は、大津市南滋賀2丁目441 大伴利幸宅の改築に先立つて実施したもので、南滋賀町廃寺の東90mに位置し、調査対象面積は310m<sup>2</sup>である。当該地は、既存建物により、すでに大きく攪乱されていたが、南側に2m×10mの、北側に2m×5mのトレンチを2本設定し、調査を実施した。調査は昭和61年4月28日に実施したが、現地表下60～70cmまで、砂質土が厚く堆積し、それ以下においても、一部腐植土層が30cm、それ以下は疊を含んだ腐植土が厚く堆積しており、明確な遺構、遺物の検出はなかった。わずかに平瓦片1点、弥生土器片1点が攪乱土内より出土しただけで、南滋賀廃寺に関わる遺構面は、土石流等により、すでに削平されていた可能性が高いと考えられた。さきに調査を実施した60-4地点においても、同様の土石流とみられる厚い砂礫土の堆積があり、このラインに旧河道が想定される。

(大橋 信弥)



第4図 61-1地点 位置図



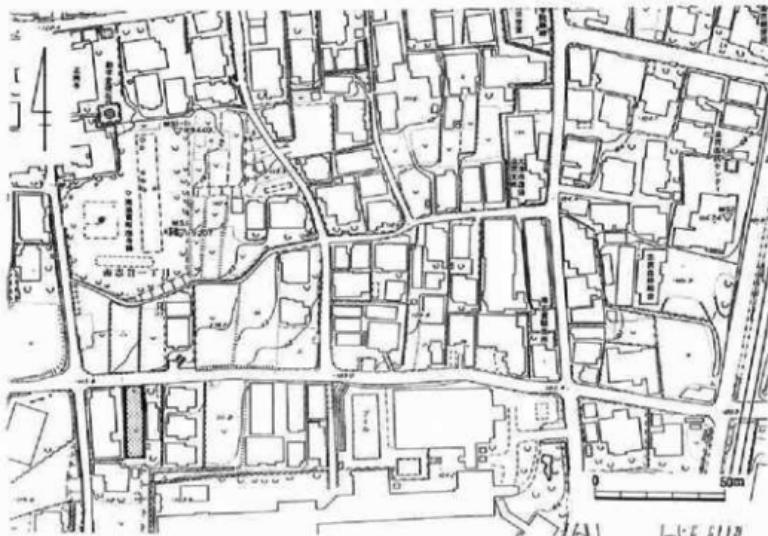
第5図 61-1地点 断面柱状図

### III. 61-2 地点の調査

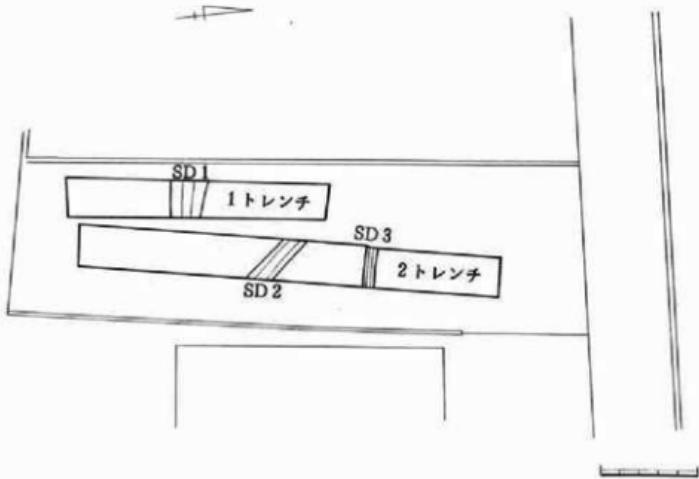
本調査は、大津市南滋賀1丁目663-1山極清次宅の新築に先立って昭和61年5月19日から5月24日まで実施したもので、南滋賀町廃寺の南門推定地の南側に位置し、調査対象面積は260m<sup>2</sup>である。当該地は、畠地で良好な遺構の残存が予想されたので、東側に2m×22mの、西側に2m×13.5mのトレンチを2本設定し、調査を実施した。現地下40～50cmで、溝跡数条を検出した。溝内からは、弥生土器、須恵器、土師器、瓦片などが若干出土したが、ほかに明確な遺構、遺物の検出はなかった。当該地は南滋賀廃寺の立地する地点より南へしだいに傾斜する地点にあたっており、南滋賀廃寺に関わる遺構面はすでに削平されていた可能性は高い。

#### 1. 基本土層

全体に砂質の強い土質であるが、第1層が暗茶褐色砂質土で、畠地の耕作土とみられる。第2、第3層は同色の砂層で本来の地山とみられるが、第3層はやや粘質で区



第6図 61-2地点 位置図



第7図 61-2地点 トレンチ設定図

分した。

## 2. 遺構

三条の溝を検出した。

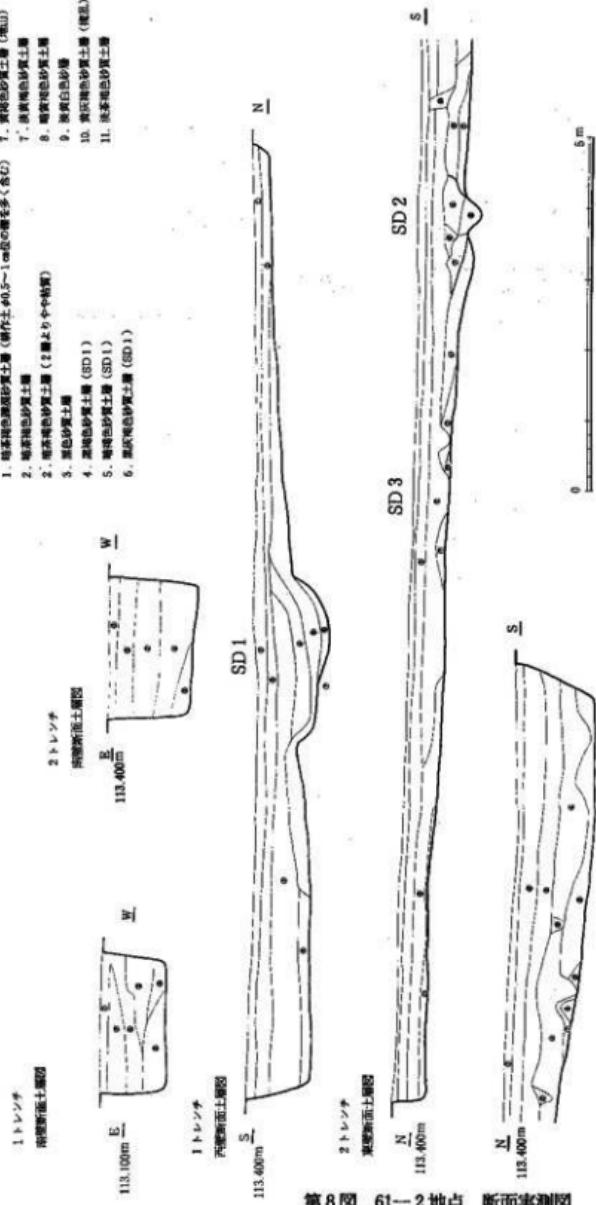
**SD1** 1トレ中央で検出した幅1.2m、深さ75cmをはかり、第1層は黒色砂質土、第2層は黒褐色砂質土、第3層は暗褐色砂質土、第4層は黒灰褐色砂質土であった。溝内から弥生土器片が20点余出土した。

**SD2** 2トレのほぼ中央で検出した幅90cm、深さ60cmをはかり、埋土は第1層が黒褐色砂質土、第2層が暗黄褐色砂質土であった。溝内より弥生土器の破片の出土があった。

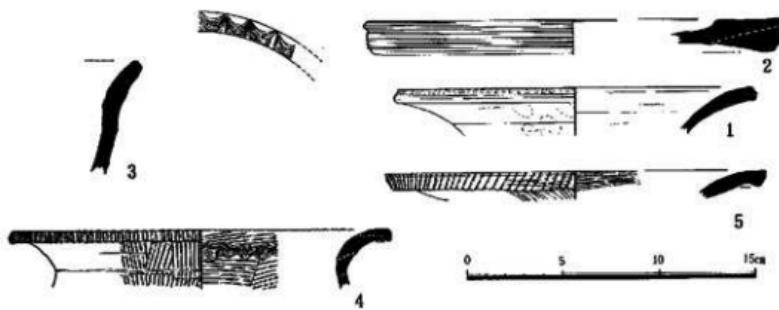
**SD3** 2トレのやや中央の北よりで検出した幅50cm、深さ20cmの溝である。埋土は黒色砂質土で、瓦片1点が出土した。

## 3. 遺物

出土した遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、瓦片などであったが、図示できたの



第8図 61—2地点 断面実測図



第9図 61-2地点 遺物実測図

は、弥生上器 5 点のみであった。弥生土器はすべて中期初頭（畿内第Ⅱ様式並行期）に比定される。

弥生土器は、壺 2 点、鉢 1 点、甌 2 点の計 5 点である。

**壺 A (1)** 口径 18.6cm、残存高 2.4cm をはかる口縁部破片である。頸部から大きく外湾し、端部は面をなしており、端部上面に刻目をめぐらす。内外面とも丁寧にナデで調整する。（2トレ上層より出土）

**壺 B (2)** 口径 22.0cm 前後をはかる小破片で、おそらく頸部より大きく外湾して、端部を肥厚させており、端面に 5 条の沈線をめぐらせている。（1トレ、SD 1 出土）

**鉢 (3)** 口径 28.8cm、残存高 5.8cm をはかる鉢の小破片である。体部はゆるやかに内湾し、口縁部は短かく外湾し、端部は面をなす。内面は横方向のハケのあとナデで調整しており、外面はヘラ磨きで、丁寧に仕上げている。（1トレ遺物面より出土）

**壺 A1 (4)** 口径 19.6cm、残存高 3.15cm をはかる小破片である。頸部より大きく外湾する口縁部で、端部は面をなしており、端面には刻目をめぐらし、口縁外面は縦方向の荒いハケ目調整で、頸部に一条の沈線をめぐらしている。内面は横方向の荒いハケ目で調整し、頸部に多条の波状文をめぐらせている。（1トレ遺構面出土）

**甌 A2 (5)** 口径 10.0cm、残存高 1.4cm をはかる甌の口縁部である。小破片で全様は明らかでないが、大きく外湾して、口縁端部は面をなしている。端面下端

に刻目をめぐらすが、工具が端面上端にも当っており、浅い刻目状をなしている。口縁部内面は荒いハケがナデ消されており、A1との手法のちがいをみせている。（1トレ遺構面出土）

### 3. ま　と　め

当初予想した、南滋賀廃寺南門前面にかかる直接の遺構検出はなかったが、その状況を知る若干の知見を得ることができた。そして、この地点でも、中期弥生土器の山土があり、南滋賀遺跡が、廃寺を含め、かつて弥生中期の集団墓地を検出した、大津市立南志賀小学校まで一帯のものとして存在したことを確認できた。

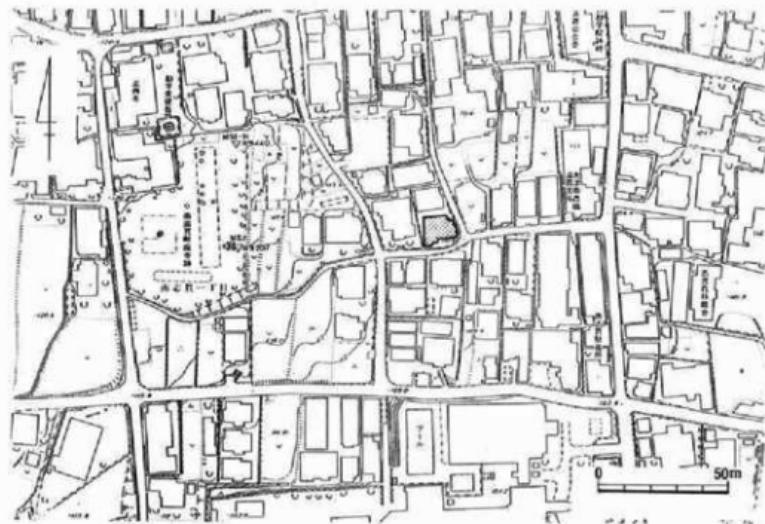
（大橋 信弥）

#### IV. 61-3 地点の調査

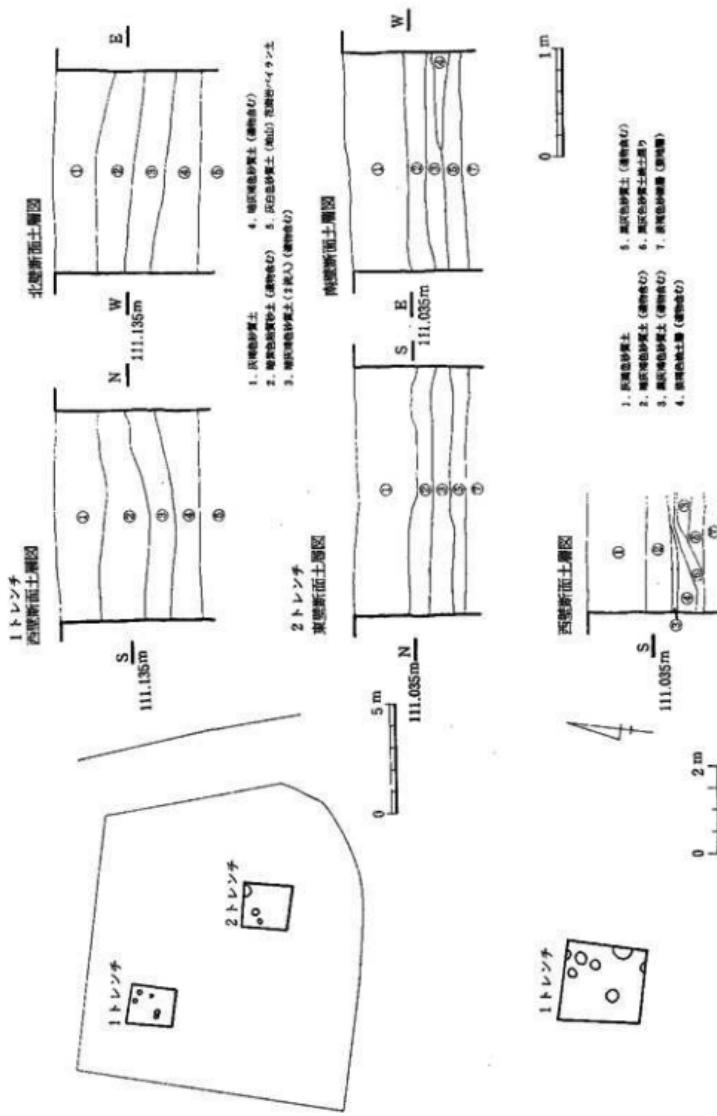
本調査は大津市南志賀1丁目11-27山極靖子宅の改築に先立って昭和61年5月24日に実施したもので、南滋賀廃寺の南門推定地の西側に位置し、調査対象面積は167m<sup>2</sup>である。当該地は、宅地であったが、木造住宅であったこともあって良好な遺構の残存が推定されたので、東側に3m×2.5mの、北側に2m×3mのトレンチを2本設定し、調査を実施した。現地表下60～90cmで、柱穴跡10基を検出した。遺構面より、弥生土器が若干出土し、柱穴跡も、それに関わるとみられるが、ほかに明確な遺構、遺物の検出はなかった。したがって南滋賀廃寺に関わる遺構面は、すでに削平されていた可能性が高い。

#### 1. 基本土層

基本土層は大きく5層に分類され、第1層は灰褐色砂質土からなる造成土で40～60cmをはかる。その下に第2層の暗灰褐色砂質土があり、旧耕作土とみられる。第3



第10図 61-3地点 位置図



第11図 61-3地点 平面断面実測図

層の黒灰褐色砂質土と第4層の黒灰色砂質土は遺物包含層で、第5層の灰白色砂質土は花崗岩のバイラン土で、地山とみられる。このうち第4層が南滋賀廃寺の整地層である可能性がある。

## 2. 遺 溝

明確な遺構としては、1トレンジの断面でわずかに確認した溝一条と、10基余のピットであった。溝は第3層から切り込んでおり、或は、南滋賀廃寺にかかわる可能性もある。これに対してピットは直接地山を掘り込んでおり、遺構面より出土した弥生土器にかかわる遺構とみられる。溝跡は検出したところで幅80cm以上、深さ30cmをはかり、柱穴については径25～40cm前後のもののが多かった。

## 3. 遺 物

出土したのは、包含層から出土した中期弥生土器が大半で南滋賀廃寺と重複する、南滋賀遺跡にかかわるものである。ここでは、弥生土器を中心に解説しておきたい。

### a. 弥生土器

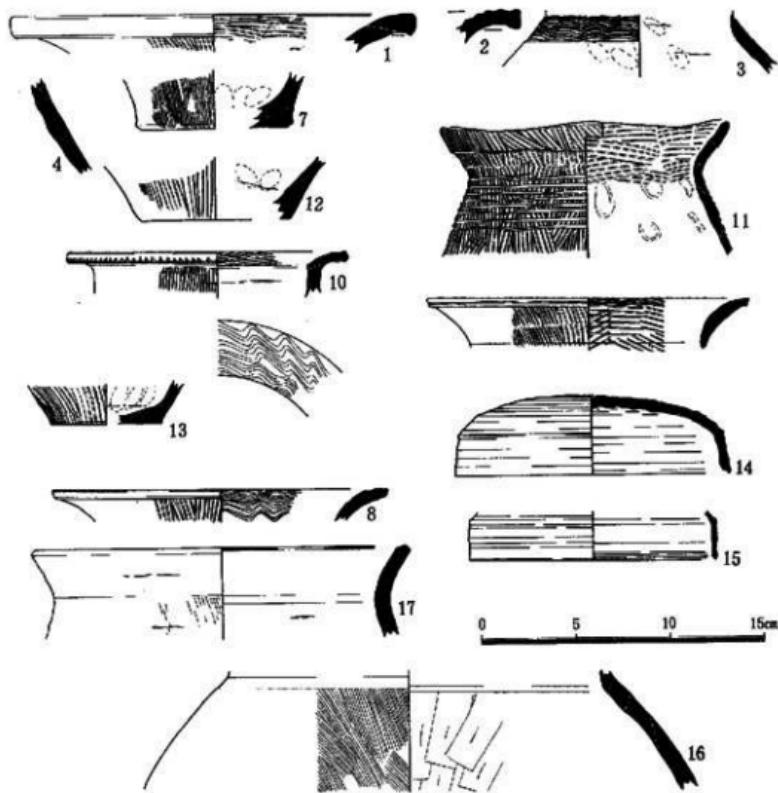
器種としては、壺・甕のみで、おおよそ畿内第II様式に並行する中期初頭に比定されるものである。

壺 A (1) 口径21.6cm、残存高2.0cmをはかる口縁部破片で、大きく弓なりに外湾し、端部はやや肥厚して面をなす。口縁外面はナデ調整、頸部はハケ調整で、内面は横方向のハケ目調整である。(2トレンジより出土)

壺 B (2) 小破片で、口径は復元できないが、大きく外湾する口縁部で、端部は面をなす。端面には5条の波状文をめぐらし、口縁内面は荒いハケ、外面はハケ調整後ナデで仕上げている。

壺体・底部(3～12) 3～6は壺の体部とみられ、3にはヘラ沈線による11条の波状文が、4には直線文、5には流水文、6には刺突文が肩部に廻っている。7は底径7.8cmをはかる壺底部である。(3～6は2トレンジ、7は1トレ出土)

甕 A1(8・9) 弓なりに外湾する口縁部をもつ甕で、8は口径18.0cm、残存高1.75



第12図 61-3地点 遺物実測図

cm、9は口径17.2cm、残存高2.75cmをはかる。外面端部には3条のヘラ沈線をめぐらすもの(8)と1条のもの(9)がある。内面は横方向の荒いハケ調整後、多条の波状文をめぐらせる。(1トレス暗茶色砂質土出土)

**甕 A2 ⑩** 口径14.0cm、残存高2.5cmをはかり、頸部から大きく外反し、端部は面を成す。端部下端には刻目をめぐらし、体部外面は縦方向の荒いハケ、口縁部内面は横方向の荒いハケで調整する。(1トレス暗茶褐色砂質土)

**甕 B ⑪** 口径15.2cm、残存高7.25cmをはかる。いわゆる近江型の山形口縁をもつ甕である。口縁部外面は斜方向のハケ目、口縁部内面は、横方向の荒い

ハケ、体部外面は縦方向のハケの後 8 条のヘラ直線文をめぐらしている。

(1 トレ暗茶褐色砂質土)

壺底部 (12・13) 12 は底径 8.0cm、13 は底径 6.0cm の壺の底部である。ぶ厚い底部で外面縦方向のハケ調整 (12 は 2 トレ暗茶褐色砂質土、13 は 1 トレ暗茶褐色砂質土)

#### b. 須恵器、土師器

古墳・歴史時代の須恵器、土師器には、壺蓋 2 点と壺 2 点の出土があった。

須恵器壺蓋 (14・15) 14 は口径 14.7cm、器高 4.25cm、15 は口径 13.1cm、残存高 2.65cm の蓋である。天井部と口縁部の境界は段をなし明確に区別されており、天井部はゆるやかなカーブを描き、口縁部は 14 の場合、やや外傾するが、15 の場合は垂直に着地する。天井部外面はヘラ削り、口縁部外面はナデ調整、陶邑の形式で、II 型式の第 1 段階に比定され、およそ 6 世紀前半代のものであろう。(1 トレ、2 トレの茶褐色砂質土出土)

土師器壺 (16・17) 16 は腹部の張るタイプの壺体部で、外面は縦方向のハケ目調整、17 は、口径 20.0cm の長胴壺の口縁部で、体部外面は縦方向のハケ目調整、口縁部外面はナデによる調整、飛鳥・藤原京土器 IV に類似のあるものである。(2 トレ遺構面出土)

#### 4. ま と め

南滋賀廃寺にかかる遺構の検出はなかったが、弥生時代の拠点集落、南滋賀遺跡の一角であることは明らかになった。

南滋賀遺跡の実態は必ずしも明らかではないが、集落と墓地が一体となった。湖南西部の拠点集落であることは、これまでの諸調査によって明らかであり、今後遺跡の規模、構造の解明が課題であろう。

(大橋 信弥)

## V. 61-4 地点の調査

本調査は、大津市皇子が丘1丁目647の中西 登氏宅の改築に先立って実施した。調査は、昭和61年8月19日、20日の両日を要して実施し、用地内に、 $2 \times 6\text{ m}$ （1トレ）、 $3 \times 3\text{ m}$ （2トレ）の二本の試掘杭を設定し、小型のバックホーを使用して掘り下げた。

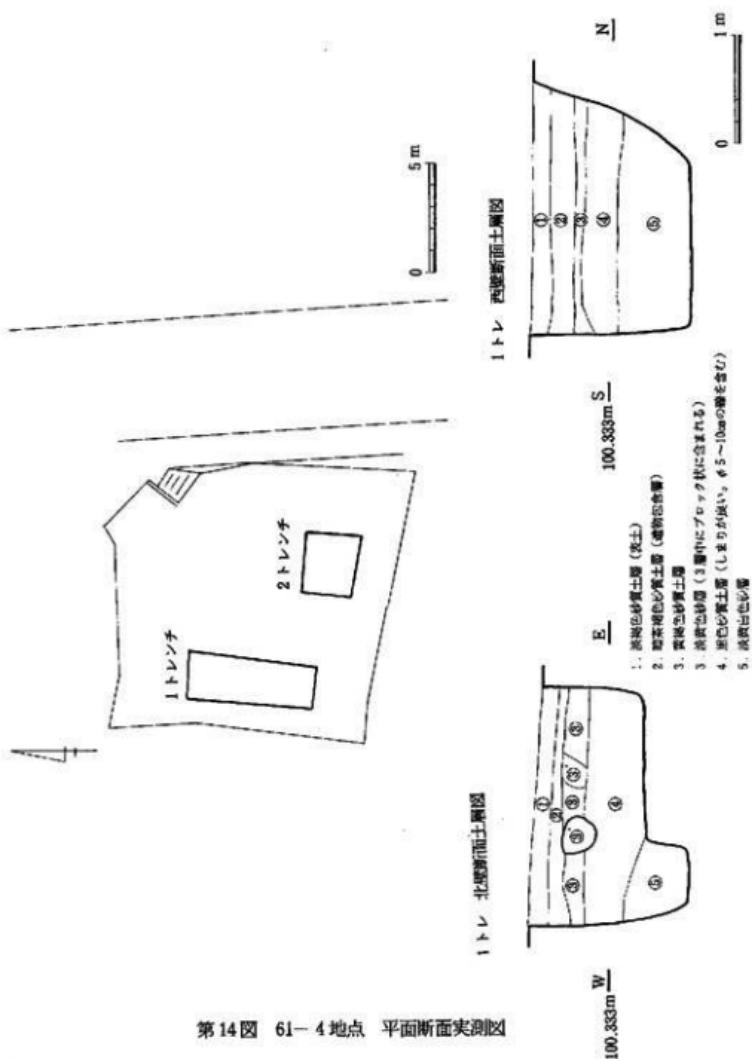
当該地は、推定大津宮内裏南門の南70mに所在し、いわゆる大津宮の朝堂院の発見が期待された。

### 1. 基本土層

大きく5層に分類され、第1層は淡褐色砂質土からなる造成土、第2層が暗茶褐色砂質土からなる旧耕作土とみられる。第3層が黄褐色砂質土で、床土の可能性が高い。第4層は、しまりの良い黒色砂質上の整地層で、大津宮時代から平安時代後期のものとみられる。そして、第4層の下には、淡黃白色の砂層（花崗石のバイラン土）が厚く堆積しており、地山面を形成している。



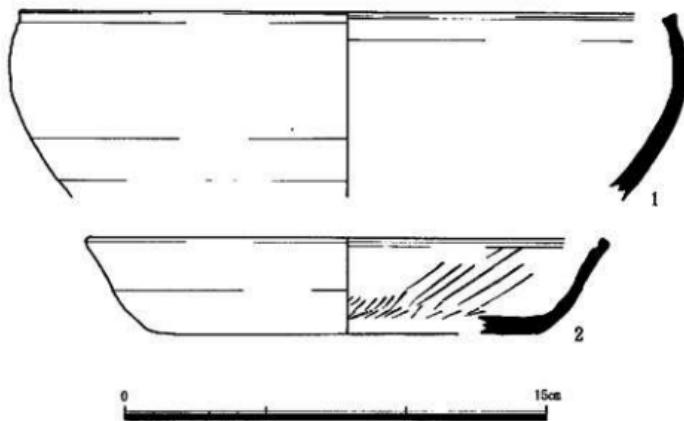
第13図 61-4地点 位置図



第14図 61-4地点 平面断面実測図

## 2. 遺構

1トレでは、基本土層で見たような、自然の土層が観察できたが、2トレは、大き



第15図 61-4地点 遺物実測図

く削平されているため、大きな搅乱のみを検出した。これは、本来の傾斜地を、宅地造成のため、大きくカットしたためとみられる。ただし、1トレにおいても、明確な遺構の検出はなく、出土遺物も搅乱層より出土した。須恵器、土師器片のみであった。

### 3. 遺 物

いずれも、1トレの暗茶褐色土より出土したもので、須恵器鉢は平城宮土器Vに通有なもので8世紀後半代に、土師器壺は、平城宮土器IIIに類似があり、8世紀中葉代のものであろう。

須恵器鉢(1) 口径23.3cm、残存高6.6cmをはかる鉢で、口縁部は体部からゆるやかに内湾して、端部は面をなす。内外面とも丁寧なナデ仕上げ。

土師器壺(2) 口径18.3cm、底径13.7cm、器高3.4cmをはかり、口縁部は下半がやや内湾し、上半が外反、口縁端部を内側に丸く肥厚させる。内面には螺旋文と斜放斜文の暗文がほどこされている。

### 4. ま と め

今回の調査においても、推定大津宮の朝堂院に関わる遺構の検出はできなかつたが、

1 トレでも明らかになったように、一応平安時代以前の整地層の残存が確認され、今後の調査、研究の進展により、遺構、検出の可能性が、さらに強くなったと考える。

(大橋 信弥)

## VI. 61-5 地点の調査

本調査は、大津市錦織2丁目817林弘一氏宅の改築に先立って実施したもので、推定大津宮内裏南門の東60mに位置し、調査対象面積は194m<sup>2</sup>である。

当該地は、隣接する京阪電鉄石坂線建設に際し、大きく削平を受けているとされていたが、事実、現地表下60~70mで、大津宮時代の遺構面を検出したもののその上面はかなりの搅乱を受けていた。調査は昭和61年10月3日から12月25日まで約3ヶ月を要して実施した。

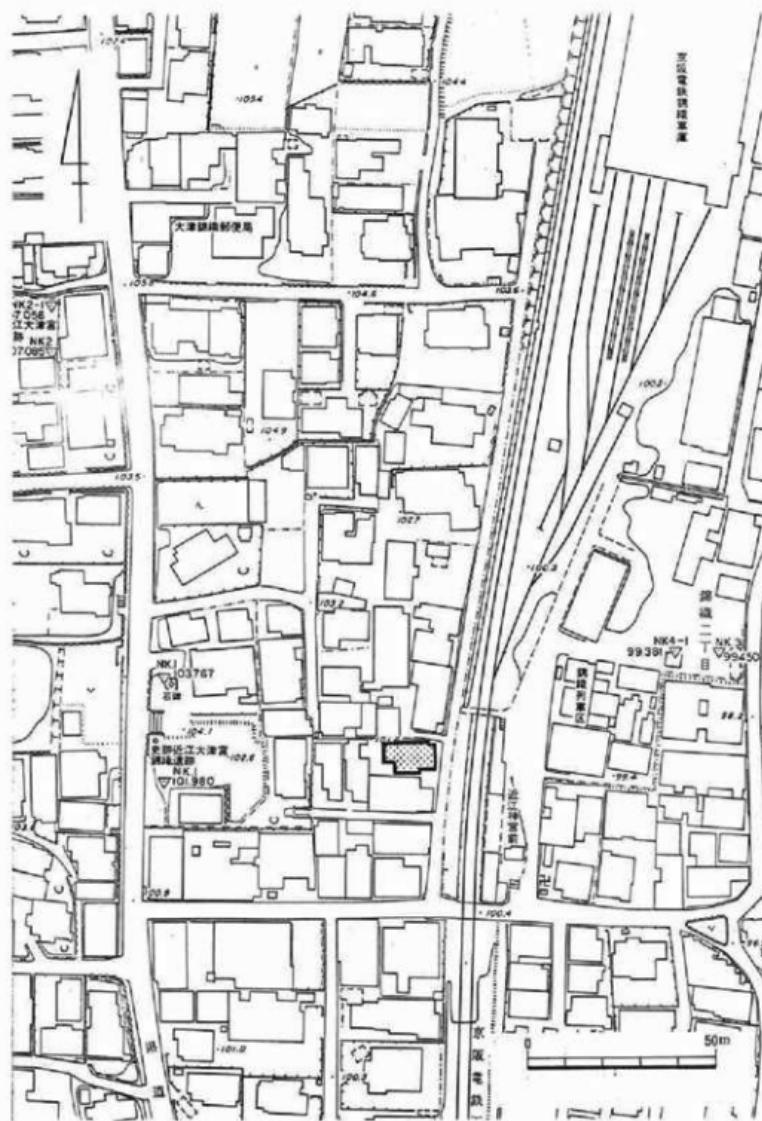
### 1. 基本土層

宅地造成にかかわり、多くの搅乱が認められたが、一応大津宮の整地面とみられる層位まで、大きく4層に類別される。第1層は、暗茶褐色砂礫土からなる造成土、第2層が、旧耕作土とみられる茶褐色砂質土、第3層が茶褐色砂質土、第4層が遺物包含層である暗黄褐色砂質土で、遺構埋土もこれに類するものである。第5層が、大津宮時代前後の地山面とみられる黒色微砂礫混砂質土で、基本的に検出した遺構は、すべてこの層を切り込み築造されていた。

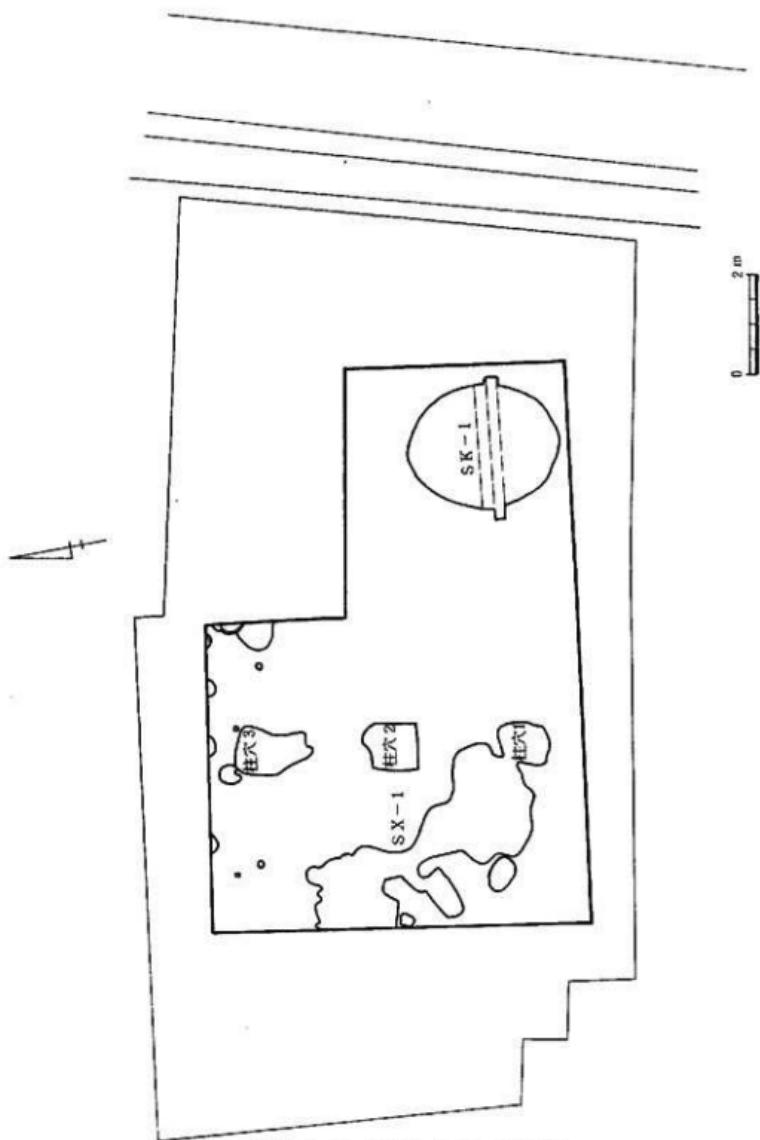
### 2. 遺構

検出された主要な遺構は、大津宮時代と見られる、南北に連なる柱穴列と、その一部を切り込んで築造された土坑などである。

**柱穴列** 柱穴列は、一辺110cm前後、深さ40~60cmの方形掘方をもち、径30cm前後の柱穴痕を持つもので、ほぼ2.8m間隔で、3ヶ所検出された。柱穴2、3には南北へ抜き取り痕があり、柱穴からは、土師器片や須恵器片が出土しているが、小破片のため、時期は明確にはできない。しかし、南端の柱穴掘方を切る落ち込み(SX1)から、7世紀後半代の須恵器や土師器が出土しており、柱穴列が大津宮時代に所属することが推測されるのである。そして今回検出した柱穴の方位や規模も、從来検出されている遺構群のそれと一致しており、それを裏付けるとみられる。ちなみに既発見の諸遺構との関連を見てみると、推定大津宮軸より東62.9m、推定内裏南



第16図 61-5地点 位置図



第17図 61-5地点 トレンチ設定図

門に取り付く複廊から北 14.9m の位置にあり、従来発見されている柱穴列と合せて、南門の東西に、一边 39m のほぼ正方形に区画された一角が復元され、人津宮の構造を考える上で、注目されるところである。(第 22 図)

**土坑 1 (SK 1)** 調査地の西端で検出した椭円形の土坑で、東西 3.0m、南北 2.5m、深さ 63cm をはかる。層序は第 1 層が暗茶色砂質土、第 2 層が黒色微疊混砂土、第 3 層が淡黒褐色砂質土、第 4 層が黄褐色砂質土であった。主として第 1 層より土師器片、須恵器片が大量に出土した。

**落ち込み 1 (SX 1)** 柱穴の一部を切り、調査地の西に所在する不整形の落ち込み、遺物包含層の一部である可能性もあり、埋土は暗黄褐色砂質土である。埋土中より 7 世紀後半代の須恵器、土師器片が出土している。

### 3. 遺 物

出土したのは須恵器、土師器で、須恵器では环蓋・环身・壺・甕など、土師器では甕のみが図示できた。

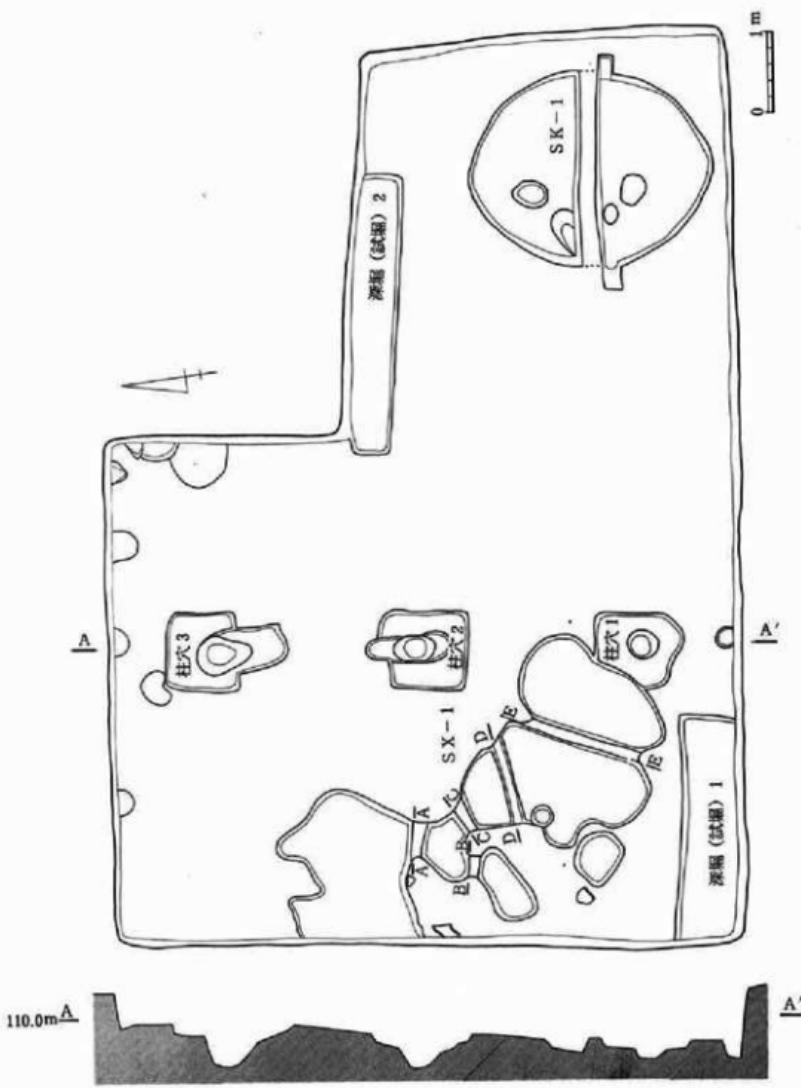
#### a. 須 恵 器

**环蓋 A (1 ~ 3)** 天井部が円弧を描き、口縁部も、ゆるやかに内湾して、端部を丸くおさめるもの、2 は端部を少し外反させる。口径は、1 が 11.2cm 前後、2 が 12.2cm 前後であった。陶邑の TK 217 に類例が認められる。(1 は SK 1、2 は SX 1、3 は遺構面出土)

**环蓋 B (4)** かえりをもつ环蓋で、口径 10.2cm をはかる。口縁部は比較的直線的でかえりは、断面三角形を呈す。TK 217 に類例がある。(包含層より出土)

**环身 A (5 ~ 7)** いずれも、短く外湾して立ち上がる口縁部をもち、体部は浅い椀状を呈す。7 は図示できなかったが、5 は口径 12.2cm、6 が口径 11.6cm に復元される。これらも、TK 217 に類例のあるものである。(いずれも包含層よりの出土)

**环身 B (8 ~ 10)** 8 を除いて、小破片のため若干復元に問題があるが、8 が口径 10.0cm、器高 3.6cm、9 が口径 12.2cm、10 が口径 8.2cm をはかる。平坦な底部から、やや内湾気味に立ち上がり、口縁部上半が外反して、端部を丸くおさめている。TK 217 に類例が認められる。(いずれも遺物包含層より

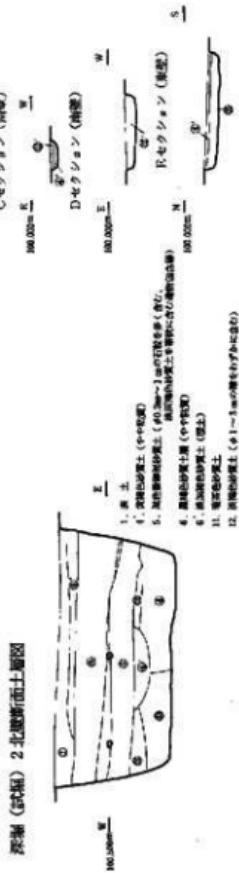


第18図 61-5地点 平面実測図

SK-1 北側断面土層図



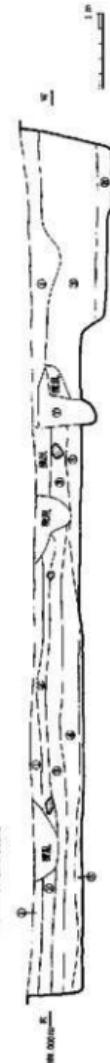
横割（試掘）2 北側断面土層図



トレンチ 西側断面土層図

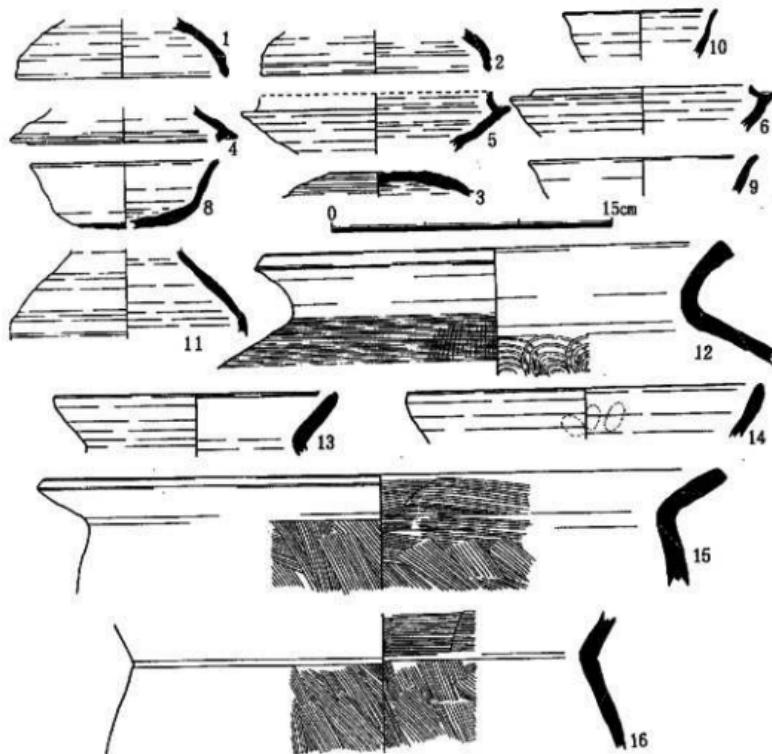


トレンチ 附壁断面土層図



第19図 61-5地点 断面実測図

- 壺**
- (1) 壺の体部破片、ただし小破片のため詳細は不明。(包含層よりの出土)
  - (2) 口径 24.6cm をはかる大型の壺、口縁部はゆるやかに外反して、端部は



第20図 61-5地点 遺物実測図

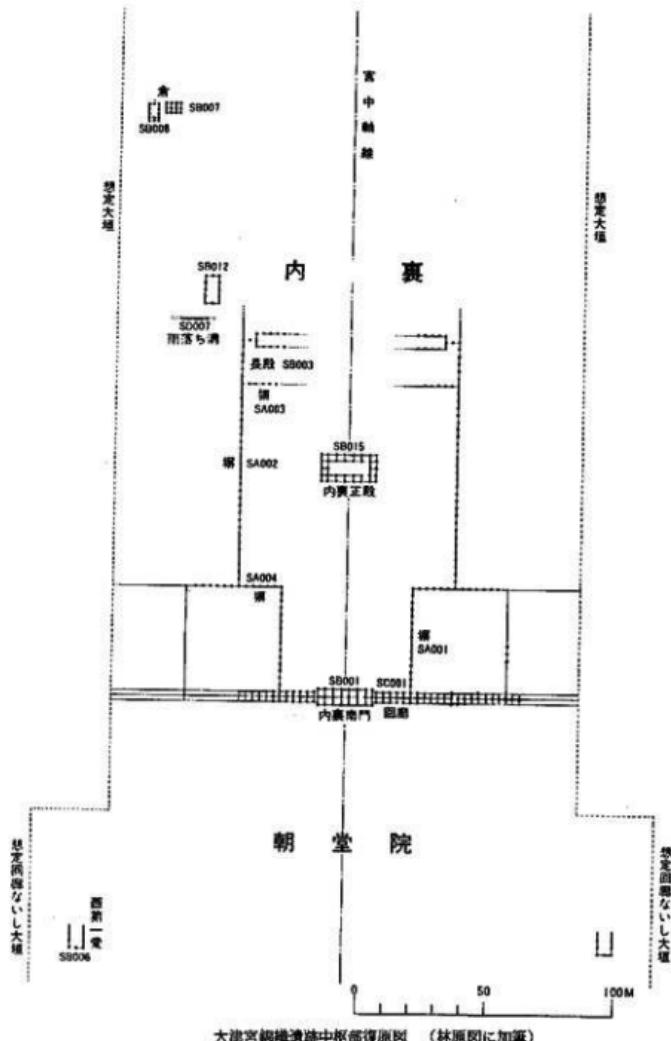
面をなしている。肩部外面にはカキ目が、体部内面には青海波が明瞭に残る。TK 209 に類例が認められる。(包含層よりの出土)

#### b. 土師器

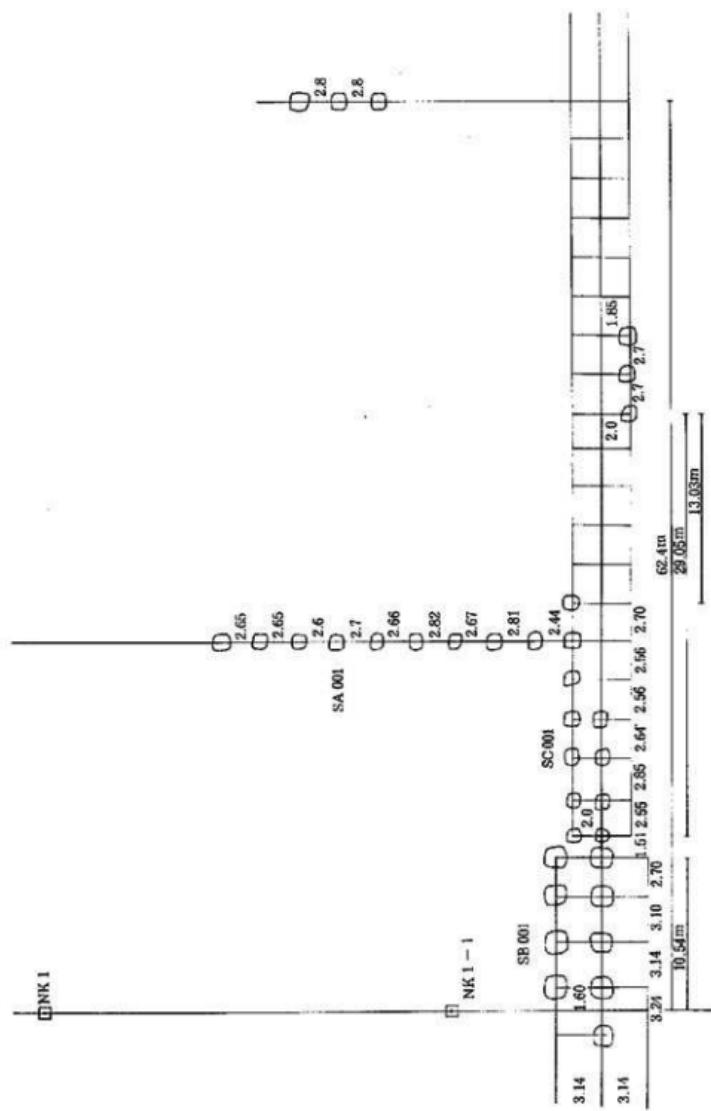
**壺A (13・14)** 小破片で口径の複元には疑問が残るが、おおよそ 15cm 前後の口径をもつ長胴壺で、口縁部は「く」字に屈曲し、14 がやや内湾するが、直線的にのびて、端部を丸くおさめている。6世紀後半を前後する時期のか。(いずれも包含層よりの出土)



第21図 61-5地点 遺構配置図(1)



第22図 61—5地点 造構配置図(2)



第23図 61-5地点 造構配置図(3)

壺B（15・16） 15は口径36.2cmをはかる。大型の長胴壺、14も15よりやや小さいが、同じように大型の長胴壺とみられる。口縁部は「く」字に外反し、端部は面をなしている。口縁部外面はナテ調整、内面は横方向のハケ目、体部は内外面とも縦方向のハケ目による調整、これも、6世紀後半から7世紀代のものとみられる。（いずれも包含層よりの出土）

#### 4. ま と め

今回の調査では、従来未発見であった推定大津宮内裏南門にとりつく複廊から北にのびる一本柱穴列が発見され、大津宮錦織遺跡の構造を考える上で、新しい資料を提出することになった。今回の発見は柱穴3ヶ所にすぎないが、既発見の中軸より東37mで発見された。南北柱列と、中軸より西で発見された東西柱列（南門の北42m地点）と合せて、東西37m、南北42mのほぼ方形に近い区画が、南門の北側の両サイドに存在する可能性が高くなった。これは前期難波宮で発見された「八角殿院」に類似した配置をとっており、注目されるところであった。今後の調査の進展により、その実態がさらに明らかになると考える。なお、当該地は、昭和62年、国史跡として追加指定され、永久に保存されることになった。

（大橋 信弥）

## VII. 61-6 地点の調査

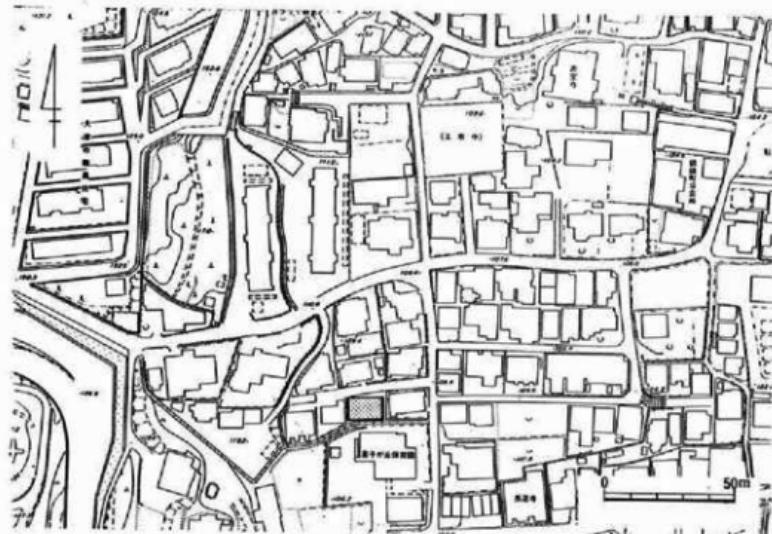
本調査は、大津市皇子が丘1丁目630古市宅の新築に先立って実施したもので、推定大津宮内裏南門の南西80mに位置し、調査対象面積は148m<sup>2</sup>である。調査は、昭和62年3月25日から28日まで、3日を要して実施した。

### 1. 基本土層

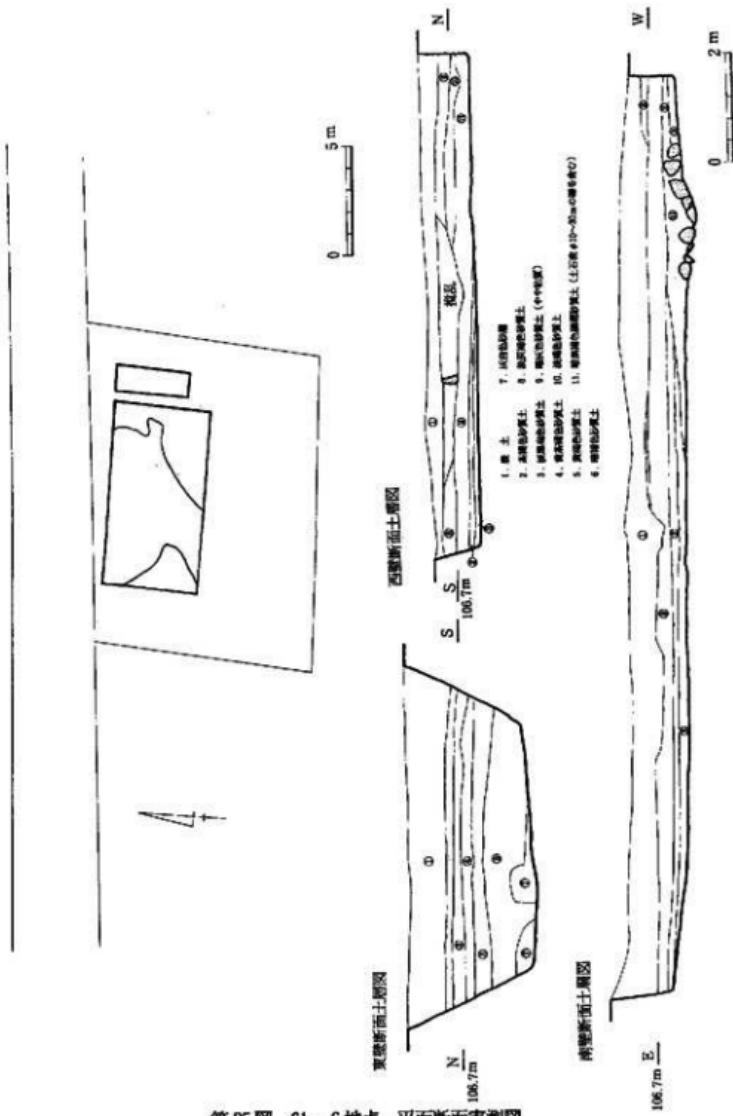
大きく4層に分類され、第1層が造成土、第2層が暗灰色砂質土、第3層が、茶褐色砂質土、第4層が淡黒褐色砂質土であった。

### 2. 遺構

当該地は、宅地となっているが、既存物はなく、ほとんど大きな攪乱はなかった。西側に9m×4.5mの、東側に3.5m×1.2mのトレンチを2本設定し、調査を実施した。現地表下50cmで、地山面に達したが、西側のトレンチで、南北方向の土石流を



第24図 61-6地点 位置図



第25図 61-6地点 平面断面実測図

検出した。土石流は、幅5mをはかり、人頭大、コブシ大の礫を大量に含んでおり、若干の土師器片が出土したがほかに明確な遺構、遺物の検出はなかった。

### 3. 遺 物

出土した遺物は、いずれも小破片で、図示までには至らなかった。一応奈良時代のものとみられる。

### 4. ま と め

これまで錦織遺跡では、推定内裏南門以南では、大津宮時代の遺構の発見はきわめて少なかった。今回もその例にもれず、明確な遺構の検出はなかったが、周辺での継続調査は、今後とも必要であろう。

(大橋 信弥)

### VIII. 62-1 地点の調査

本調査は大津市桜野町1丁目823-5 梶田幸男宅の新築に伴うものである。

当該地は、近江大津宮推定内裏南門の南方約50mの地点に位置し、推定朝堂院に含まれる。近江大津宮に関連する遺構遺物が検出される可能性は高いといえ得る。

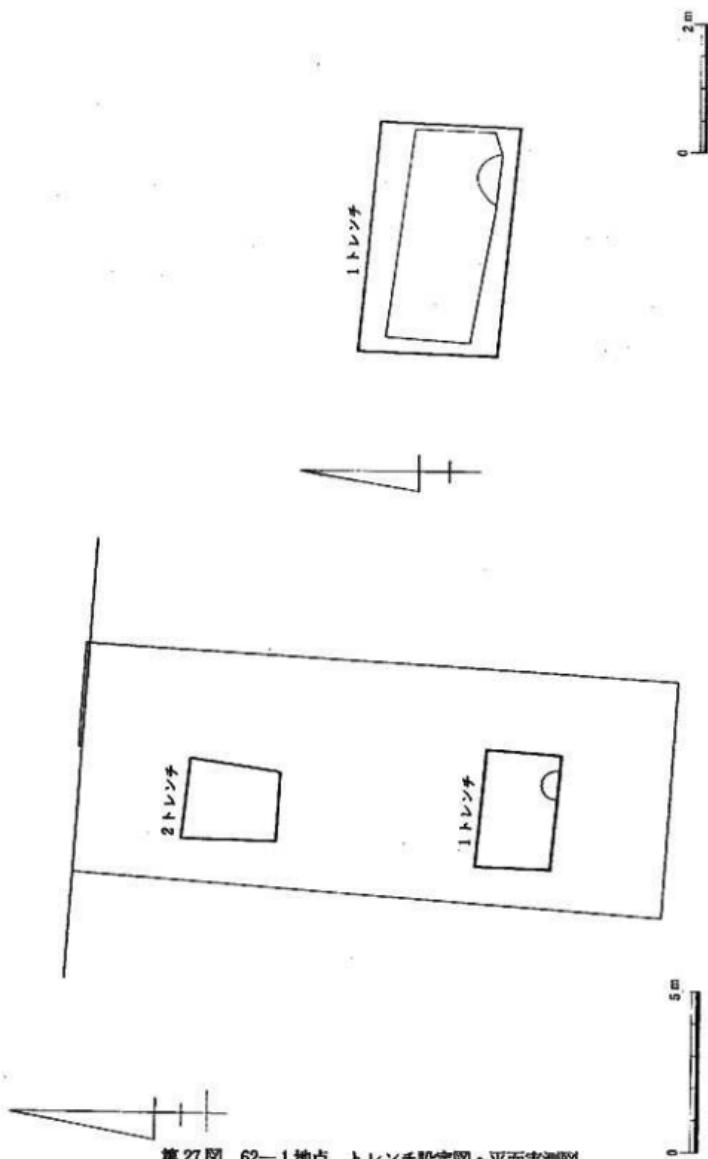
調査は、対象地131m<sup>2</sup>に2本のトレンチを設定して昭和62年6月2日に実施した。いずれのトレンチにも表土下0.5mにおいて地山土が検出され、近世の遺構（土坑）が1基検出された以外、遺構、遺物は全く検出されなかった。

整地の状況を示す土層も認められず、当該地においては、遺構面はすでに削平されたものと判断できる。

（大橋 信弥）



第26図 62-1地点 位置図



第27図 62-1地点 トレンチ設定図・平面実測図

## IX. 62-2 地点の調査

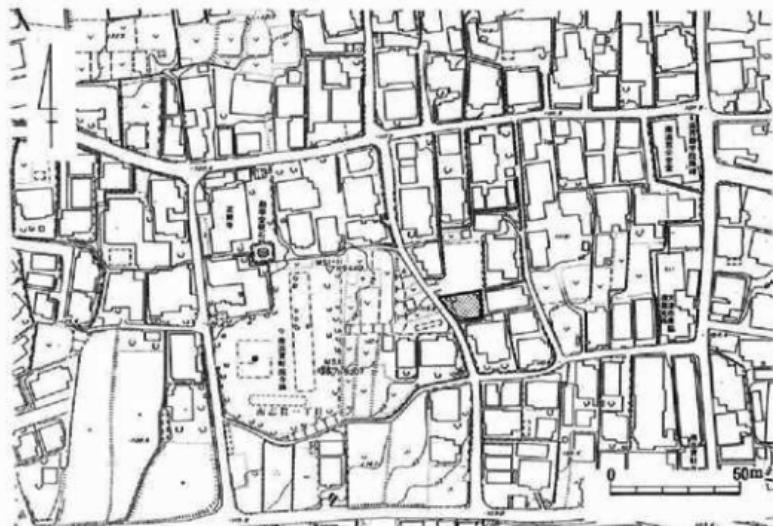
### 1. 調査への経過

大津市南滋賀1丁目勧学堂578-6番に所在する、青木久幸氏の所有地において、住宅建設が計画された。当該地は、史跡南滋賀廃寺の東方約80mに位置する。当該地においても、南滋賀廃寺に関連する遺構・遺物が包蔵されている可能性は高いと考えられよう。また、付近に広がる弥生時代の遺構・遺物の有無についても問題となるところである。

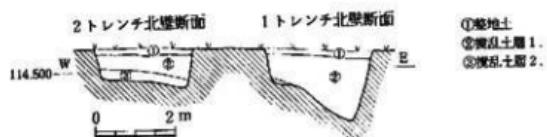
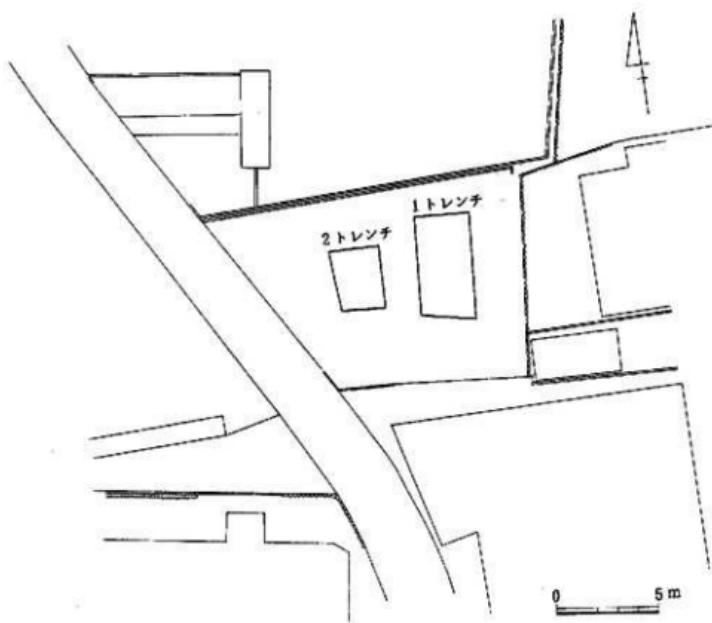
こうした状況を考慮し、滋賀県教育委員会では、青木久幸氏の御理解と御協力を得て、建設工事に先立ち、発掘調査を実施するものとした。調査対象面積は、139.84 m<sup>2</sup>を測る。調査は昭和62年12月10日に実施した。

### 2. 調査の内容

当該地は、南滋賀廃寺の中心伽藍からは外れるが、確實に寺域内に含まれる。伽藍配置については、多くの研究が蓄積されているが、古代寺院の寺域内の様相について



第28図 62-2地点 位置図



第29図 62--2地点 トレンチ設定図・断面実測図

は、まだまだ不明な点が多い。大津市内では坂本八条廃寺において、寺域北東隅の調査で、楼閣かとも考えられる $2 \times 3$ 間の掘立柱建物が報告されている程度である。今回の調査においては、十分に解明されていない寺域内の様相を把握することが第一の視点となるであろう。当該地は、海拔 115m付近に位置し、南志賀扇状地の中心付近に当たる。

調査は、用地内に $2.5m \times 5.0m$ の 1 レンチと $2.5m \times 3.0m$ の 2 レンチを設定して実施した。重機を用いて表土等を掘削したところ、2 レンチでは約 70cm で地山土に至るが、1 レンチでは中央付近から急激に深くなり、東端では深さ 190cm を測るようになる。土層観察では、大きく削平された状況を示し、旧住宅建設時の整地土が認められた。すなわち、当該地においては遺構面は既に削平されたようであり、搅乱土の中から若干の白鳳から奈良時代の遺物が出土した以外、遺構は全く検出されなかった。

出土した遺物は、整理用コンテナに 1 杯分であり、その大半が瓦類である。今回はその詳細については割愛するが、いずれも、既に知られている形式に含まれ、新しいものは存在しない。

調査は、写真や図面で記録化した後、埋め戻しをもって終了した。

### 3. ま と め

今回の調査においては、南滋賀廃寺に関連する遺構は全く検出されなかった。これは、旧住宅建築時における削平のためと考えられる。ただし、搅乱状態での遺物は少量ではあるが検出された。

住宅建設時における削平とはいえ、地形から判断すれば、本来的にも当該地は急傾斜の地形であった可能性が指摘できる。また、付近の調査結果によれば、大川の氾濫や土石流の流入が、幾度となく寺域内を侵している。寺域内においては、寺院関連の諸施設や、建立氏族の居宅等、多くの構築物が存在した点は確実である。急傾斜の地形、あるいは自然災害の脅威、寺院の中心地を含めて、南志賀の地理的条件は決して好ましいものではない。こうした条件を克服しつつ、また、それらによるダメージを受けつつ、寺院が建立され、維持されていったようである。

今回の調査における直接の成果はコンテナ 1 杯分の遺物のみであった。しかし、改

めて南滋賀廃寺の意味を考える契機が与えられた。何にもに増しての大きな成果であろう。

（細川 修平）

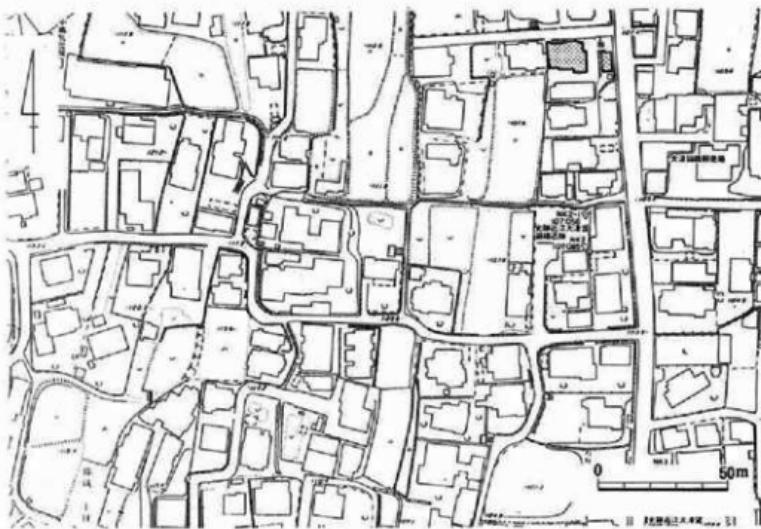
## X. 62-3 地点の調査

### 1. 調査の経緯

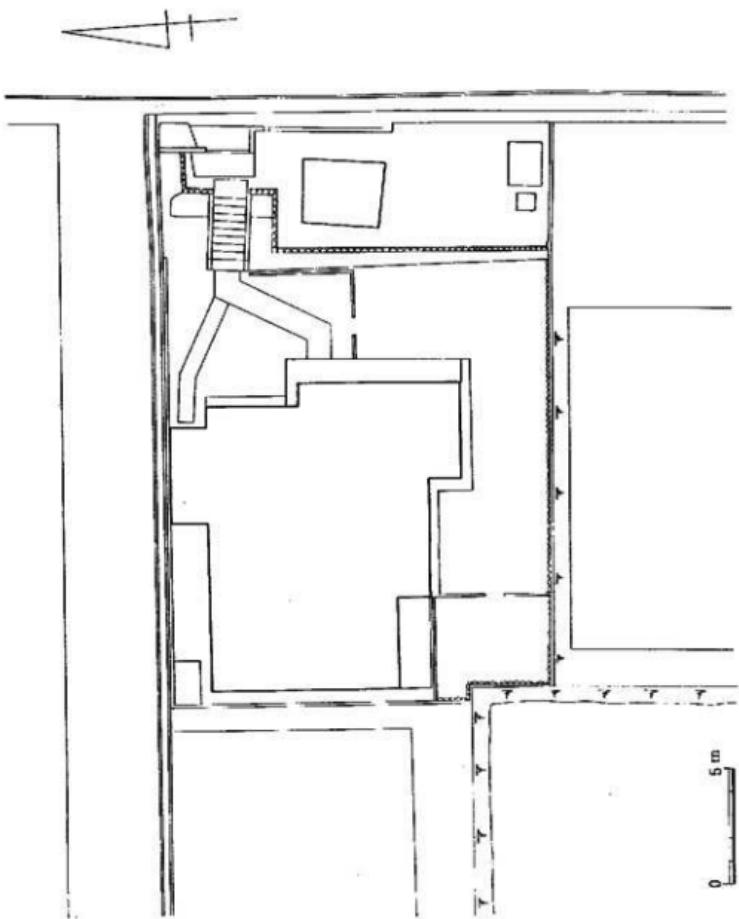
当該地は、推定近江大津宮のほぼ中軸線上を南北に通る県道沿にあり、推定正殿の北方約120m、政庁域を囲う大垣の北辺及び北辺上に位置すると考えられる東西に長い建物から北方に約50mの地点にあたる。ここに住宅の改築が予定されたため、宅地の駐車場にあたる所に3m×4mの試掘トレンチを設け、遺構・遺物の有無、土層の確認調査を行つた。

### 2. 調査の結果

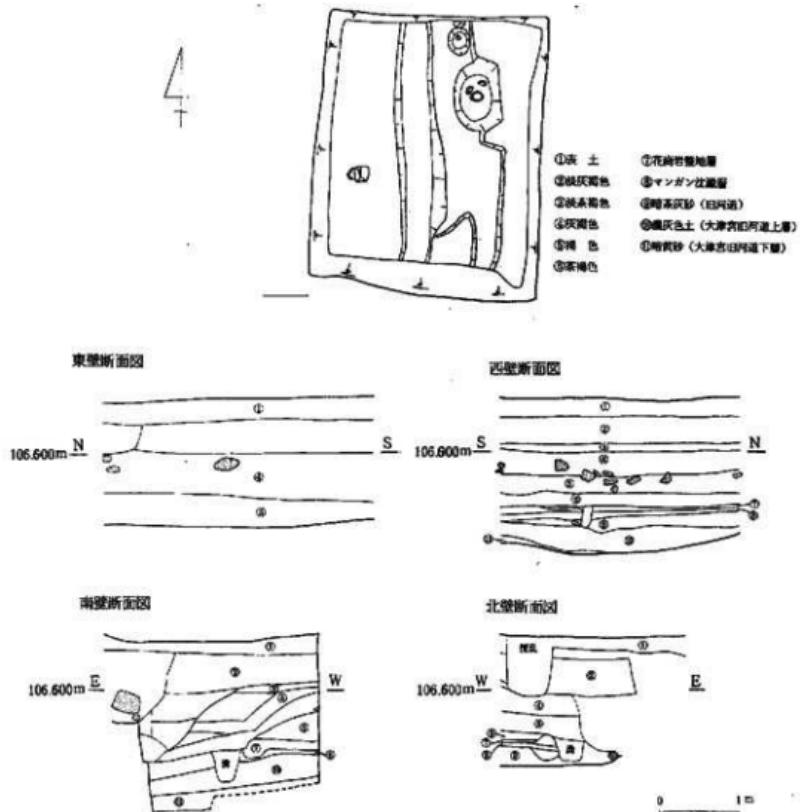
調査地周辺の地形は西から東にかけて傾斜し、南北方向では北に向かって高くなっている。このため大津宮関係の遺構面は南側で地表面近くに、当調査地である北側においてはかなり深いレベルで検出されることが知られている。調査地点においても地表下1.5mまでは表土を除いて厚いシルト層が数層にわたって堆積し、そのすべてに室町時代の遺物の破片を希薄ながらも含むものであった。室町時代を中心とした遺跡の立地す



第30図 62-3地点 位置図



第31図 62—3地点 トレンチ設定図



第32図 62-3地点 平面断面実測図

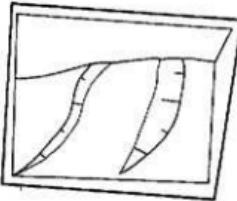
る扇状地を流れる柳川がたびたび氾濫を繰り返していたものと考えられる。また同時に石垣を試掘抗東側で南北方向に検出し、同石垣を境に東西方向に地形に段差があったことを示している。この石垣の東側はおそらく南北方向の道が通っていたものと考えられ、旧錦糸村の中心を通る幹線道路であったものと思われる。これは先に述べたように現県道とほぼ一致し、推定大津宮の中軸線上を通過するものである。

大津宮時代の造構面は地表下約2.0mで検出した。同層には簡単な整地が実施され

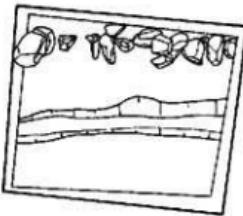
ており、同時代の遺物も出土した。具体的な造構は検出されなかったが、検出した造構面が安定したものであり、同レベルにまで至る大きな攪乱も見られない所から付近に近江大津宮関連の造構が存在する可能性は高いといい得る。また住宅の改築が予定される地点は、試掘坑を設定した地点より一段高くなっているのであるが、室町時代にはこの斜面の処理が検出された石垣によって行われているため、室町時代以前の層は、調査地点と宅地とは同レベルである可能性が高く、大津宮の造構面も、当調査地と同レベルで広がるものと考えられる。

(横田 洋三)

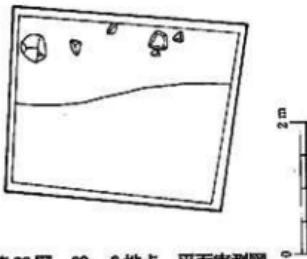
第3 造構面



第2 造構面



第1 造構面



第33図 62-3地点 平面実測図

## XI. おわりに

本書では、昭和61・62年度に実施した9カ所の発掘調査成果を報告することができた。昭和60年度に刊行した『錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅰ』以来、一応、年報的な報告が定着したと言える。断片的な報告では、具体的な成果は得られないとの批判もあるが、いたづらに成果が埋没することも、やはり問題であろう。今後とも、できるかぎり、かかる報告を継続したい。関係者各位の御支援をお願いする次第である。

(大橋 信弥)

# 図 版



1. 61-1地点 調査前景（北より）



2. 61-1地点 T-1 遺構検出状況（北より）



1. 61-1 地点 T-2 遺構検出状況（北より）



2. 61-1 地点 T-2 深掘り断面状況（北より）



1. 61-2地点 調査前景（南より）



2. 61-2地点 T-1 全 景（北より）



1. 61-2地点 T-1 全 景(南より)



2. 61-2地点 T-1 断 面(東より)



1. 61-2地点 T-2 全景(南より)



2. 61-2地点 T-2 深掘り状況(北より)



1. 61-3地点 調査前景（東より）



2. 61-3地点 T-1 柱穴検出状況（東より）



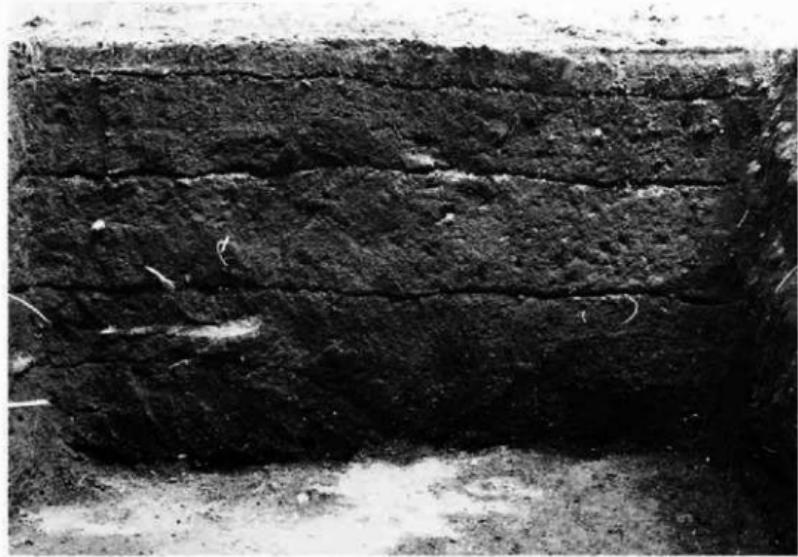
1. 61-3地点 T-1 柱穴検出状況（西より）



2. 61-3地点 T-1 断面（東より）



1. 61-3地点 T-2 柱穴検出状況（東より）



2. 61-3地点 T-2 断面（東より）



1. 61-4地点 調査前景(東より)



2. 61-4地点 T-1 全景(南より)

図版一〇 遺構



1. 61-4地点 T-1 断面(南より)



2. 61-4地点 T-2 近景(北より)



1. 61-5地点 調査前全景（東より）



2. 61-5地点 柱穴列検出状況（北より）

図版  
一二  
遺構



1. 61-5地点 柱穴列近景（北より）



2. 61-5地点 柱穴列全景（西より）



1. 61-5 地点 柱穴列検出状況（西より）



2. 61-5 地点 トレンチ南断面（北より）

図版一四遺構



1. 61-5地点 SK-1近景(東より)



2. 61-5地点 SX-1近景(南より)



1. 61-6地点 調査前景(西より)



2. 61-6地点 T-1 全景(東より)

図版一六 遺構



1. 61-6地点 T-1 近景(南より)



2. 61-6地点 T-1 近景(東より)



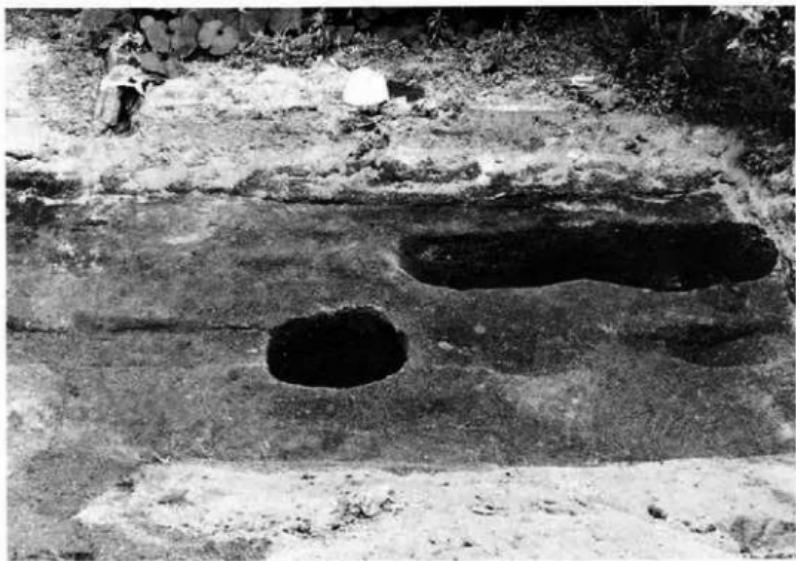
1. 61-6 地点 T-2 近景(北より)



2. 61-6 地点 T-2 断面(東より)



1. 62-1地点 調査全景(北より)



2. 62-1地点 T-1 近景(北より)



1. 62-1 地点 T-2 重機掘削状況（東より）

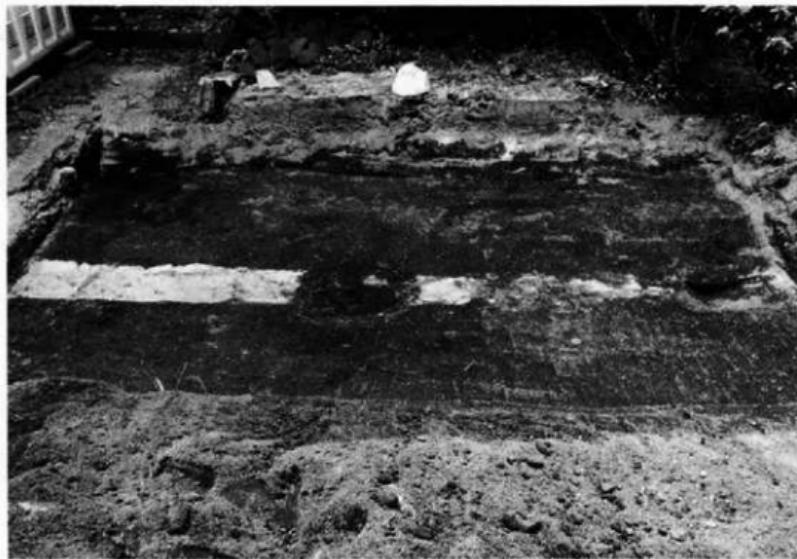


2. 62-1 地点 T-2 全景（東より）

図版二〇 遺構



1. 62-1地点 T-1 遺構検出状況（東より）



2. 62-1地点 T-1 遺構検出状況（北より）



1. 62-2地点 調査前景（西より）



2. 62-2地点 表土掘削状況（南より）

図版二二 遺構



1. 62-2 地点 T-2 全景（南より）



2. 62-2 地点 T-1 全景（南より）



1. 62-3地点 調査前景（北より）



2. 62-3地点 造成土除去状況（南より）

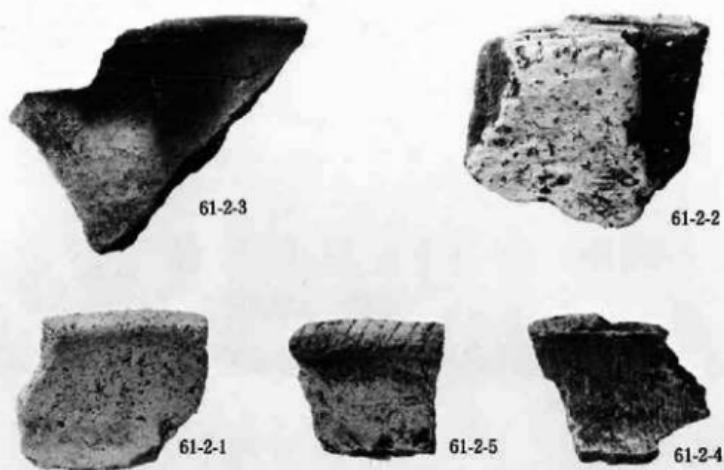


1. 62-3地点 造成土除去状況（南より）

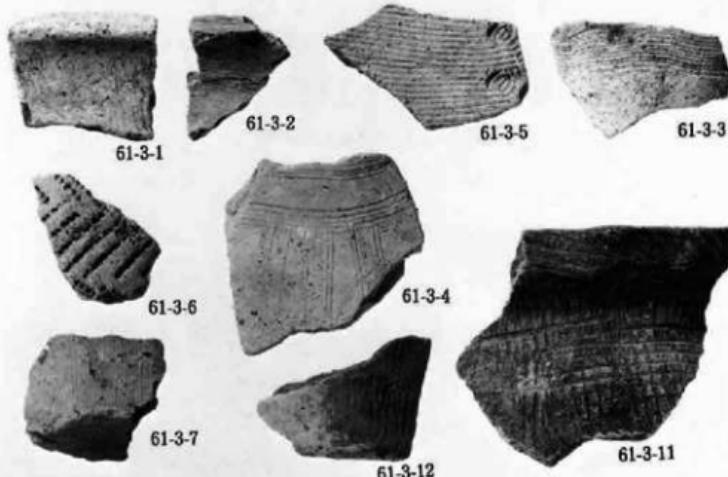


2. 62-3地点 造成土除去状況（西より）

圖版二五遺物

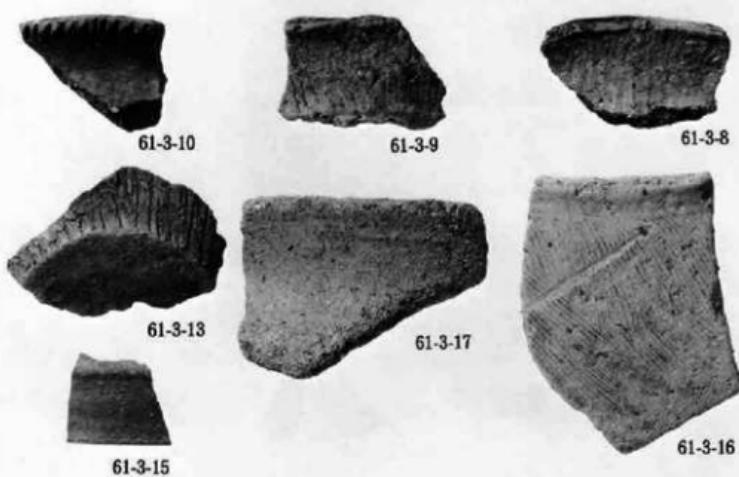


1. 61-2地点 出土遺物

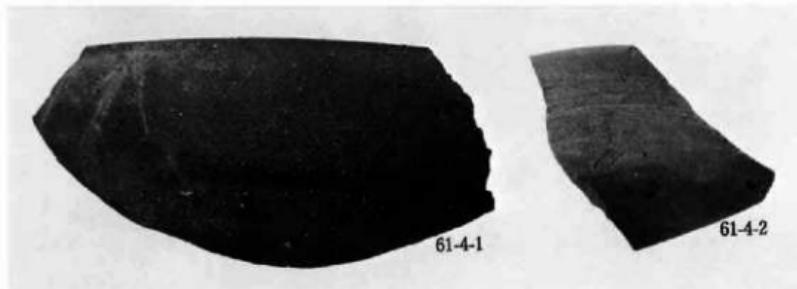


2. 61-3地点 出土遺物

図版二六遺物

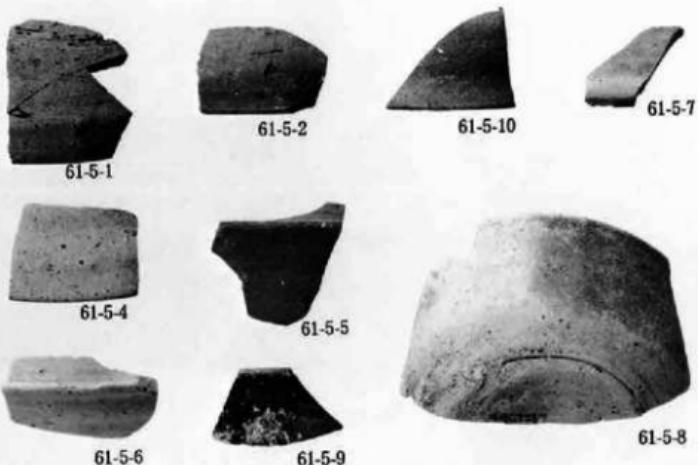


1. 61-3 地点 出土遺物

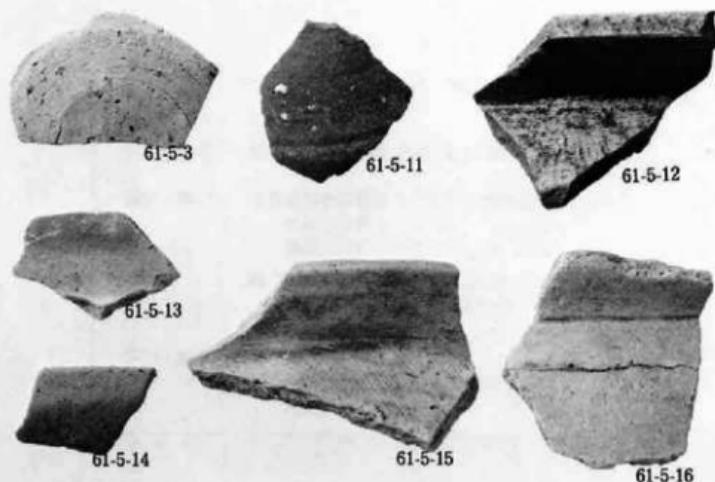


2. 61-3 地点（上） 61-4 地点（下） 出土遺物

圖版二七 遺物



1. 61-5地点 出土遺物



2. 61-5地点 出土遺物

刊行年月	1989年3月31日
刊行物名	錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅲ
編集・発行	滋賀県教育委員会文化部文化財保護課 大津市京町4-1-1 電話 0775-24-1121 内線 2536
著	滋賀県文化財保護協会 大津市瀬田南大萱町1732-2 電話 0775-48-9781
印刷・製本	日興商會 尼崎市東難波町5-10-30 電話 06-482-4501